自由の希求と無限

―ノヴァーリスにおける近代性と非近代性をめぐって―

基礎教育学コース　　井　上　徳　仁

Der Wunsch nach Freiheit und die Unendlichkeit :
Vornehmlich über die Moderne
und die Nicht-Moderne in Novalis

Norihito INOUE

Es wird oft hingewiesen, dass die deutsche Romantik nur eine irrationale Seite hat. Heute wird eine Interpretation, dass die Romantik schon die Modernisierung überstiegen hat, ein Hauptstrom. Aber die Romantik hat sich wirklich mit der zeitgenössischen Aufklärungsbewegung vergebunden. In der Romantik gibt es eine Seite, die Freiheit zu wünschen. Das Problem, sie zu wünschen, würde sich in der Pädagogik mit der Autonomie verbinden.

In dieser Abhandlung wird versucht, das rationale und irrationale Denken von Novalis zusammen zu denken.

目　　次

１．はじめに
⑴　問題の所在
⑵　ノヴァーリスをめぐる状況（先行研究）
２．知と行為の関係
⑴　知と行為
⑵　自我と非我
３．自我と非我の統一
⑴　自我と非我の変容
⑵　理想の設定
４．おわりに

１．はじめに

⑴　問題の所在

ロマン主義といえば遊びや無目的的運動といった非合理的な概念を結びつけられることが多いかもしれない。とりわけ今日のポストモダンをめぐる状況において，ドイツのロマン主義がすでに近代的啓蒙を超克していたという解釈はすでに主流となっている。初期ドイツロマン主義者ノヴァーリス（1772-1801）の人間形成観もまた，近代的自我の表出のみに収まらない，自我と非我の等根源的な関係から展開されるものとして理解されている。しかし，ロマン主義（特に初期ロマン主義）は同時代の啓蒙主義と結びついているということも看過されてはならない。ロマン主義者はそもそも自由を求める革命的側面も有している。自由への希求は，教育学的な文脈でみれば自我による非我の克服，つまり自律の問題と密接に関係してくるであろう。啓蒙的な運動と自我＝非我との衝突がここに見てとれる。本稿は，ノヴァーリスに確実に内在する近代的思考を放棄せず，同時にその非近代的（超近代的）な思考と絡み合わせることによって，そこで生じる問題と導かれる課題を検討するものである。

⑵　ノヴァーリスをめぐる状況（先行研究）

初期ロマン主義をめぐる先行研究で一番に挙げなくてはならないのはやはりベンヤミンの『ドイツロマン主義における芸術批評の概念』であろう。ベンヤミンによれば初期ロマン主義者において，主体による客体の認識はありえない。ある物が認識されるという出来事は主体によってなされることではなく，またある物それ自体が自己自身のみによって認識するという閉鎖的なことでもない。そうではなく，「ある存在者が他の存在者によって認識されることは，認識されるものの自己認識，認識するものの自己認識，さらに，認識するものが，かれが認識するところの存在者によって認識されること―これらのことと同時に起こる」（Benjamin, 1919＝1970, 66頁）のである。主体が客体を認識する際には他に同時に三つの認識が生起する

ことになる。池田全之はこのような関係を「収束点が不在な意味の全面増殖としての対象との対話的関係」（池田 2010, 35頁）とまとめる。こうしてロマン主義者においては主体と客体とを隔てる境界はなくなり，両者は無限に対話を重ねるようになるという解釈が導かれる。

無限という概念に着目した場合，デリダの研究を挙げられよう。そもそもロマン主義者，とりわけノヴァーリスの著作には未完のものが多い。『青い花』も小説でありながら未完のまま仕事が終えられている。新しい百科全書を作ろうとしても「一般草稿」という名の断章群に留まったまま完成されることは無かった。しかしデリダによれば，著作が未完のままであるということは，まさにそのことによって無限にその構想が広がり続けるというロマン主義者の戦略なのである。こうしたデリダの解釈を受け継ぎながら仲正昌樹もまたロマン主義者の仕事を「脱近代性」と評価し現代的文脈から捉え直そうとする。

このような脱近代性を人間形成の文脈で解釈する研究として，無限の完成可能性という視点から近代的な目的論的立場の人間形成を否定するもの（Behler 1989, 池田全之 2010）が挙げられる。

Behlerによれば，ノヴァーリスは近代的な「線的思考」（Behler 1989, S.262）を退け，「いつもすでに」（ibid, S.265）無限の完成可能性に触れているという本来的経験（ibid.）を押し出した。池田全之は，上述したように「自我イコール非我」（池田 2012, 35頁）という観点からノヴァーリスにおいては「自我・非我関係は対話モデルに変貌する」（ibid.）と述べている。

このように今日ロマン主義者のなした仕事は近代を超克するものとして解釈されることが主流となっている。こうした解釈に共通するのは，ロマン主義がもつ脱近代的な性格を積極的に評価し，近代的な思想を乗り越えていこうとする姿勢である。しかしそうした立場からでは，ロマン主義に内在する近代的な性格がほとんど考慮されないままポストモダンとの親和性が強調されることになる。

こうした見方に反して，ノヴァーリスに内包する近代性を強調するものもある。トーマス・マンはロマン主義に内在する近代性を見抜き[1]，共和主義の理念との親近性を評価している[2]。

本稿ではロマン主義の脱近代的性格を積極的に評価しながらも，そこに内在する近代的性格を放棄しない。そうすることで今までに論じられなかった問題を浮上させうるであろう。

その際本稿では特にノヴァーリスの「一般草稿」(1798-99) に着目する。デリダとの関連で上述した通り，「一般草稿」とは百科全書を作るために残された断片集である。それは未完のまま体系的な書物になることはなかったが，未完であるということがまさにロマン主義者の策略なのであった。まさにロマン主義的であるこの未完の断片集には，近代的な観点から思考された断片が潜んでおり，近代と非近代の視点が相互に絡み合ったテキストとして本稿の課題に一致するのである。

2．知と行為の関係

(1) 知と行為

ノヴァーリスにとって「哲学とはまずフィヒテ哲学であって，「哲学する」と言う代わりに「フィヒテする」fichtisierenという動詞を作り出したほどである」（中井 1998, 11頁）。知識学と結びつけて自由の実践的実現を目指したフィヒテ哲学は，批判されながらもその根本的な企図はノヴァーリスにおいても確認される。「フィヒテ哲学は自己活動への刺激である」（Ⅱ, S.271）と述べているように，ノヴァーリスもまたフィヒテのように思想と行動の同時的実践から自由を希求する。

> 「元来は，知と行為は混じり合っている」（Ⅲ, S.246）
> 「知と行為は，両者をたがいに関係させながら，同時になされることが望ましい」（ibid.）
> 「思考，行為，観察を同時にせよ，というフィヒテの要請は，哲学の理想である」（Ⅲ, S.373）

若きフィヒテが『全知識学』の基礎で主体を押し出し，自由を実現する主体を描出したことに反し，ここでロマン主義的なイメージから実践的行動を考慮した場合，非合理や無目的的運動，自然への回帰といった態度が想起されるかもしれない。しかしここでノヴァーリスは全く反自然的な考え方で行動を導き出そうとする。

> 「子ども（主観）には，（略）―行動を引き起こす原理（客観）の絶対的な受容―が期待される。」（Ⅲ, S.253）

客観が主観を行動に導くというまさに教育的なこの断章にはしかしひとつの問題が潜む。行動がそもそも自由を実現するためになされるというのであれば，主観にまとわりつく客観とは自由をむしろ阻害するもの

ではなかろうか，という問題である。この問題に取り組むためにまず，主観（＝自我），客観（＝非我）がフィヒテとノヴァーリスにおいてどう捉えられていたのかを確認する。

⑵ 自我と非我

『全知識学』においてフィヒテは，「ＡはＡである」（『基礎』91頁）という命題から自我を考察する。これは，「「もしＡがあるならば，そうすればＡはある」ということを定立する」（『基礎』92頁）ものである。この「もし」と「そうすれば」の間に必然的連関（Ｘ）がある。Ｘは判断する自我の中に，かつ自我によって定立される。主語のＡと述語のＡはＸによって結ばれる限り，Ａもまた自我によって定立されるのである。

> 「「ＡはＡである」という命題が「自我はある」という命題を基礎づけるのではなくて，むしろ，後者が前者を基礎づける」（『基礎』99頁）。

こうしてフィヒテにおいては自我の自己定立があらゆる知にとっての第一命題なのである。こうして非自我も自我によって反定立されることになるがゆえに，非自我は自我によって規定される。

フィヒテに対して一方，ノヴァーリスは「ａはａである」（Ⅱ, S.104）と規定することから始める。

最初の行為としてａが仮定される。この最初の行為は「自由な行為」（Ⅱ, S.105）である。「自我は，不自由なものとしての自己自身，すなわち非我を反省の対象とするときは自由」（Ⅱ, S.266）であることから，このａは非我であると言える。つまりノヴァーリスにおいてはフィヒテとは反対に，まず非我を規定することから自我の規定が始まるのである。そしてａを反省の対象とした後で，「自由なものつまり自我としての自己自身を反省の対象とするときも自由」（ibid.）になる。

> 「自我は前者（非我の措定―筆者注）ではみずからの反省行為をおのれの本質から切り離し，自己自身の外へ出てゆくが―後者（自我の措定―筆者注）ではその双方を統一し―自己自身のなかへ歩み入る。自我は後者の課題を果たすためには，前者の課題を果たさなくてはならない。」（ibid.）

このように非我は自我を措定するための前提条件であることになる。「われわれは自我という言葉で何を理解しているのだろう。フィヒテはあまりに恣意的になにもかも自我のなかに含ませたのではないか」（Ⅱ, S.107）と述べているように，ノヴァーリスは自我からすべてを解こうとする姿勢をとらず，自我と非我の発生原理をフィヒテとは逆の関係で捉えている。

このノヴァーリスの理解について次のような解釈がしばしなされる。「ノヴァーリスにおいては，認識の主体と客体は固定したものではなく，相互に交換できるものである」（中井, 58頁）。あるいは，「非我が自我と等根源的」（池田 2010, 34頁）という解釈である。

しかしながらここで付しておきたいのは，自我は非我と等根源ではなく，両者は統一を目指されるべきものであるということだ。

> 「主観と客観は一体をなすべきであり（一体であるというのではない）―，統一されるべきものである」（Ⅲ, S.390）

ここまで知と行為の同時的結合，行為を引き起こす原理としての非我を確認してきた。では受容された非我との統一を目指す行為とはいかなるものか。行動を引き起こす原理の受容から行動へ。

３．自我と非我の統一

⑴ 自我と非我の変容

先に言及すれば，自我と非我の統一は受容された非我の下で陶冶された自我が，非我に働きかけることでなされる。

> 「大いなる自我にとっては，通常の〈わたし〉や通常の〈あなた〉は，補足物にすぎない。どの〈あなた〉も，大いなる自我の補足物なのだ。われわれはまったく自我ではない―しかし，自我になれるし，なるべきなのである。われわれは自我になる萌芽なのである。われわれは一切を一個の〈あなた〉へ―第二の〈わたし〉へ―変えなければならない。ただそうすることによってのみ，われわれは自分自身を，あの大いなる自我―あの一であると同時に全であるもの―へと高めるのである。」（Ⅲ, S.314）。

ただしここでノヴァーリスが非我を第二の自我に変化させると言うとき，それは自我による非我の支配とは異なる。思考と行為を同時になす思索家は「自己形成と熟練が増すにつれて自由も成長する」（Ⅲ, S.405）。

そして同時に，「自由と愛は同じ一つのものである」のだ（Ⅲ, S.406）。自由に相手に働きかけるということはここで支配とは全く逆の，愛として顕現する。非我がまずあって，自我はその下で自己陶冶をし，遂には非我をもさらに変化させるということである。両者は高い次元で変容していく。そしてこうした自我による非我の変容は偶然的発生ではなく，ある種意図的になされる。

> 「人間というものは，自分がそうしたいと思うことによって，あらゆるものを高貴なものにする（それにふさわしいものにする）ことができる」（Ⅲ,S.271）

ここに意志的な目的的運動が見られないだろうか。ここまでは非近代的な側面からノヴァーリスの思想を描出してきた。ここからは近代的な側面を拾って言及していきたい。

⑵　理想の設定

今述べたように，非我を自我と統一する行動とは理想を設定することから始まる。ここでノヴァーリスにおける理想の設定に着目してみると，ロマン主義に対する一般的な見解とは異なって，合目的的側面を見出すことができる。

> 「理想を―探し求められるものを―仮定することが，すなわちそれを見出す方法となる。思考，行為，観察を同時にせよ，というフィヒテの要請は，哲学の理想である―そしてこれを実行しようと務めることで―わたしは理想を実現しはじめる。」（Ⅲ, S.373）

「そうしたいと思う」自我によって理想が設定されることで非我と自我は変容していく。無目的的行動とは異なり，一定の目標を定めることが既存のものを超え出る契機となる。あるいはノヴァーリスは以下のようにも述べている。

> 「何か特定のことを行い，達成しようとするならば，一定の限界を暫定的に設けなければならない。」（Ⅲ, S.384）
> 「制限とはすべて，それを乗り越えるためにのみ存在する」（Ⅲ, S.269）

理想的な社会や制度を実現するためにノヴァーリスは思索をした。そうして自由に理想を追求していける者のことをノヴァーリスは芸術家と呼ぶ。「人間はみな芸術家であるべきであろう。いっさいが芸術となりうるのだ」（Ⅱ, S.497）。

このような芸術家は「みずからの感官のなかで自己形成的な生の芽を養い，（略）―外からの刺激がなくても―（略）現実の世界を意のままに変化させる道具として感官を用いることができる」。一方で，非芸術家は「外から刺激が加わらなければ反応しないし，またその精神は鈍重な物質と同様，変化には必ず先立つ外因があり，つねに作用と反作用は相等しいという機械論の根本法則にしたがっているというか，その強制下に置かれている」（Ⅱ, S.574）。

現実世界で意のままに行為をするためには，まず非我の受容が絶対的に必要であった。その受容された非我の下で自我を陶冶し，理想を設定し，その理想に向かって自我と非我を変容していく。これがノヴァーリスにおける他律からの自律である。自律しようとする自我は愛によって対象を理想的な高次のものに変容させ，そして変容して高次の段階に至った非我は再び自律した自我との関係の中で揺らぎあう。「自我と非我の一体」を目指していく運動は終わることはない。

> 「いっさいの有すなわち有一般は，自由であること，つまり必然的に統一されなければならず必然的に隔てられなければならない両極のあいだを漂うことにほかならない。」（Ⅱ, S.266）

支配とは無縁の，永遠に終わることのない自我と非我の間の揺れ動きは，「機械論の根本法則」から抜け出した自律した自我によって生まれる。

４．おわりに

愛によって自我と非我は統一に至ろうとするが，その運動にはある種合目的的運動がみられることが確認された。理想が設定されると（暫定的），いつもそれは乗り越えられる。ある理想の先には常に無限が存在しており，究極的目的には常に到達することはない。無限を志向するとはまさにロマン主義的であるが，しかしその無限は自ら能動的に作り出していくものであり，待っているだけでは訪れることはない。この近代的線的志向の先にロマン主義的な無限が広がるという思想がノヴァーリスには見られる。

教育をめぐる状況に目を向けると，理想や目的を設定し，そこに向かっていくための教育というのは合目的的人間を育成しているかのように映りがちである。しかし自律や自由に向かって理想を立て，その都度理想を高次のものにしていき，ついには無限の可能性に触れることができうるというノヴァーリスの思想は，教育において理想を語る勇気を取り戻す契機になるのではないだろうか。

「世界は生きている者にとってますます無限なものになっていく―それゆえ，多様なものを連結する仕事が終わるとき，すなわち考える自我が活動をやめるときが来ることはありえない―」（Ⅱ, S.269）

注

1）トーマス・マンは次のように述べている。「ノヴァーリスはこう言う。〈真の芸術は〉―そして彼がそこで言うことは民主主義と関係する―，〈悟性の中に位置する。それはある独特な概念に基づいて構成される。空想，機知，判断力はただ悟性のみによって要請される。そうして『ヴィルヘルム・マイスター』は全くの芸術作品である。悟性の産物である〉。民族主義的教授たちはこの一文を引用するのに躊躇するであろう。彼らの場合，心情が悟性よりも過度に重要であるので，ロマン主義がほとんど完全に近代性を意味するということをまだ理解できないのである」（Mann, T. XI, S.839）。

2）トーマス・マンがロマン主義を評価しているという解釈がある反面，マンはロマン主義を批判的に捉えていたという見方もある。前者には石井靖夫ら，後者には仲正昌樹らが挙げられる。本稿で引用したトーマス・マンの演説「ドイツ共和国について」は1922年，仲正が挙げるマンの演説「ドイツとドイツ人」は1945年になされたものである。

1945年では，ロマン主義が「ドイツを二度の世界大戦に導いたデモーニッシュ（悪魔的）な破壊力，古代ゲルマン的な野蛮性を宿している」と述べている（仲正，3頁）。そこにはマンにおける思想的断絶がありうるが，本稿で論ずるには筆者の力量が及ばない。差し当たり本稿では1922年におけるマンの演説を積極的に評価しておきたい。

引用文献

Novalis : Schriften. Die Werke Friedrich von Hardenbergs. Hg.v.Paul Kluckhohn und Richard Samuel. Zweite, nach den Handschriften ergänzte, erweiterte und verbesserte Auflage in vier Bänden und einem Begleitband.
（引用は巻数をローマ数字，頁数を数字で表す。また訳出については沖積舎『ノヴァーリス全集』，ちくま文庫『ノヴァーリス作品集』を適宜参照した。）

Behler, E. 1989: *Unendliche Perfektivität. Europäische Romantik und Französische Revolution*, Paderborn, S.252-265.

Benjamin, W. 1919: *Der Begriff der Kunstkritik in der deutsche Romantik*, Frankfurt am Main, Suhrkamp.（＝大峯顕訳 1970『ドイツ・ロマン主義』晶文社）

Dick, M. 1967: *Die Entwicklung des Gedankens der Poesie in den Fragmenten des Novalis*, Bonn, H.Bouvier.

Fichte, J.G. 1794: *Grundlage der Gesammten Wissenschaftslehre*（＝隈元忠敬他訳1997：「全知識学の基礎」『フィヒテ全集　第四巻』，哲書房。本稿は邦訳版『フィヒテ全集』から巻数，頁数の順で引用した。）

Frank, M. 1989: *Einführung in die frühromantische Ästhetik*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, S.248-286.

Mann, T. 1974: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden Band XI, Frankfurt am Mein, Fischer,

Stadler, U. 1992 : Friedrich von Hardenberg / Novalis. Ein Autor, der mehr sein möchte als bloß Poet. in: *Metamorphosen des Dichters*, Frankfurt am Mein, Fischer, S.135-150.

石井靖夫1978：『ドイツ・ロマン派運動の本質』，南江堂。

池田全之2002：『自由の根源的地平』，日本図書センター。

――――――2010：「労働的人間形成の論理とその今日的意味について」『教育哲学研究』101号，31-38頁。

田中均2010：『ドイツ・ロマン主義美学』，御茶の水書房。

中井章子1998：『ノヴァーリスと自然神秘思想』，創文社。

仲正昌樹2001：『モデルネの葛藤―ドイツ・ロマン派の〈花粉〉からデリダの〈散種〉へ―』，御茶の水書房。

宮田眞治1997：「移行と超出―ノヴァーリスにおける翻訳の諸相―」『ドイツ文学』98号，20-30頁。

――――――2004：「ノヴァーリス」『ドイツ文学』115号，141-159頁。

（指導教員　田中智志教授）